

## 先土器時代研究上の二,三の問題

メタデータ	言語: Japanese 出版者: 駿台史学会 公開日: 2012-05-24 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 杉原, 荘介 メールアドレス: 所属:
URL	<a href="http://hdl.handle.net/10291/12856">http://hdl.handle.net/10291/12856</a>

## 先土器時代研究上の二、三の問題

杉原 莊介

### 一、先土器時代という名称について

學術雜誌を編集する場合、いつも問題となるのは術語の統一である。しかし、これはうっかりやると、単なる統制になってしまう。それで、われわれができることは、少しでも合理性のある方の術語を選ぶということである。わが国の考古学界では、時代や文化の特殊性を表わすのに、しばしば土器型式名が採用される。これは、もともと普遍的に存在し、そしてそれだから比較研究ができるものとして、理由のあることである。いかなる時代の土器でも、それが属するところの社会なり、文化なりの影響をうけて存在したものであることは事実である。しかし、逆にそれらの土器が、その社会・文化の一般、あるいは特性を如実に物語っているかという点、そういうわけにはいかない。それでもし土器をもって示すならば、もっとも無難なのは時代性であろう。わが国でいえば、縄文（式土器）時代・弥生（式土器）時代という如くである。もし、文化についての表現をするならば、縄文時代文化・弥生時代文化というべきであろうし、文化・社会の特性を端的に表現しようと思うならば、あらためて別の名称を用意する必要があるであろう。また、ここ十数年間の間に、日本においても土器の製作・使用を知らない、そして少くとも新石器時代の様相がまったくなく、むしろ旧・中石器時代の様相のつよい石器文化の存在することが知られるようになった。そして、その文化は研究の最初の段階において、縄文時代よりも古いものであることが明らかにされた。これらに対して、その時代を呼ぶ時に、わが国でも研究の方法に土器を従来重視してきたのであるから、土器に基準をおく名称を与えることは、たしかに一つの便法であろう。現在日本では、こ

れに對して先土器時代と無土器文化という二つの用語が使われている。それらは、それぞれ Pre-ceramic age と Non-ceramic culture という外国名の訳である。そして、外国では Pre-ceramic culture しか Non-ceramic age ということは、あまりいわない。それは、無土器文化という語は時代性がなく、むしろ新石器時代の段階の文化でありながら土器を用いていない文化——例えばアラスカその他の地方における原エスキモー文化——に對して使う言葉であるからである。わたくしは、日本における縄文時代以前の土器を持たない石器文化は、また同時代的に大陸の旧・中石器時代の様相を暗示しようというのであるから、先土器時代という名称をこそ用いるべきだと考えている。

(『考古学集刊』第二卷第一号 一九六三年)

## 二、刃器について

先土器時代のいくつかの石器の種類の中でも、一つだけ特殊な石器 (Tool) がある。一般の石器は、多少にかかわらず、調整剝離や細部加工が施されている。しかし、刃器 (Blade) といわれる機能をもつものもあるものは、剝片のままでも石器といわれる。それは、道具を製作しようという意図が、すでに石核を調整する段階で示されているからである。このような石器は、そのように、いわゆる刃器石核 (Blade Core) の存在によってこそ石器といわれるのであるから、非調整石核や性格の不明な石核から剝離されたものは、一応区別する必要があるだろうと思われる。わたくしは、前者を剝片状刃器 (Flake Blade)、後者を刃器状剝片 (Blade Flake) と呼んだらどうであろうかと思う。調整石核 (Prepared Core) の技術が、すでに下部旧石器時代の後半に、レバロア技法 (Levallois Technique) として認められることは周知のことであるが、刃器技法 (Blade Technique) の中部旧石器時代における発生の問題や、上部旧石器時代におけるその消長については、種々の意見がありそうである。

一般に刃器といわれる石器を、ここで剝片状刃器と呼んだらというのには、もう一つの理由がある。それは、西南ヨーロッパでも、日本の内地でも、剝片状刃器が中心的な石器となっていないで、その役を果しているのはナイフ状刃器 (Knife Blade) であり、日本ではナイフ形石器の名で呼ばれているものである。一般に刃器といえば、むしろナイフ形石器のことを考えてもよいほどであるからである。

関東・中部地方における先石器時代の文化の編年に際して、その初期のころナイフ状刃器に先立って剝片状刃器の段階があるということがいわれ、これに同調したものがかなりいるが、どの資料によったものか、わたくしにはわからない。おそらく、この地方には明確な剝片状刃器は存在しないのではないかと、わたくしは考えている。

また、ナイフ状刃器を一種の尖頭器とする説があるが、茶臼山・平沢良両石器文化からすれば、それを刃器とする考えは簡単に動かないように思える。この刃器は直接具としてではなく、間接具として生活に役立った石器であり、この文化は骨器・木器の製作が盛んとなったことによって特徴づけられると理解すべきであろう。

北海道地方には明らかに剝片状刃器が認められる。この剝片状刃器の製作技術は細刃器 (Micro-blade) のそれと共通する。北海道地方は細石器文化の極めて栄えた地域である。刃器石核と細石核 (Micro-core) との関連から、両者は密接な関係があるのかもしれない。

細刃器に関連して、Side Bladeという言葉があるが、これは細刃器以外のものについて使用し、側刃器と訳したらどうであろうか。植刃器と訳すと、細刃器をも含めねばならないような気がするからである。

〔考古学集刊〕第三卷第一号 一九六五年)

### 三、細石器について

さて、さきに、剝片状刃器 (Flake Blade) と刃器状剝片 (Blade Flake)、剝片状刃器とナイフ状刃器 (Knife Blade) の関係に触れ、さらに剝片状刃器と細刃器 (Micro-blade) の関係に及んだ。近ごろ、この細刃器も剝片のままで軸柄 (Shaft) に装着 (mount) するのではなく、幾何学形細石器 (Geometric Microlith) と同じく、その剝片を幾つかに切截して用い、組合わせ道具 (Composite Tool) を造ることを本態とするものがわかってきた。これにより、細刃器用剝片 (Micro-blade Flake) には、幾組かの一定の幅が要求されることになり、事実これにはそれぞれの遺跡において特徴がありそうである。ここで、剝片状刃器と細刃器との間に多少の意味の相違が生じてくる。すなわち、剝片状刃器を剝離するには刃器石核が必要であるが、細刃器のための剝片は、細

石核からもとれるが、その他一定の幅の剥片がとれば、種々の石核があってもよい。それらを総称して細刃器用石核と呼ぶ。これには、細石核というような形態の意味はふくまれていない。細刃器用石核として、細石核以外の大部分を占めるものが舟底形石核 (Keelad Core) である。また、これには精製 (Fine) と粗製 (Coarse) の両者があり、その相違はかなり大切な意味を持ちそうである。北海道で発見される細刃器用石核として、精製舟底形石核 (Fine Keelad Core) は重要な位置を占める。なお、これにはほんとうに舟底状に近いものと、半円盤状の二者がある。これは分布に問題がありそうである。さらに、舟底状のものには一端と両端に細縞状剥離痕を残すものがあり、後者の場合には舌状を呈する。これらの研究に関し、湧別技法の発見は高く評価されてよい業績である。しかし、同じ技術によるものが、札滑遺跡では石核であったり、白滝遺跡群では彫器であったりしてはこまる。それは、前者における理解のように精製舟底形石核であろうと思う。いまままでこれが石核でない根拠として、白滝30地点遺跡で多く発見された細刃器用剥片と想像されるものに細部調整 (Trimming) のないことをあげ、それらを堅縞剥離 (Flinting) による削片 (Spall) とした。しかし、刃器の縁辺には細部調整しないのがむしろ本来の姿であろう。また白滝32地点遺跡では細刃器用剥片と考えられるものがかかりあるが、そのうち完形なものはわずかとして、これも削片とした。この完形のものの中にこそ、調整剥片 (Waste Flake) があるかもしれない、むしろ切片と思つたものの中に細刃器があつたかもしれないのである。そして、この資料で一番問題となるのは、その平坦面に残された擦痕である。これを使用痕とするか意識的に施されたものとするかが岐路である。それは無意識ではとても残らない部分にまで及んでいることから加工であろうと思われる。おそらく、湧別技法によっては、調整打面 (Faceted Platform) が得られないために、これに代わるものとして擦痕打面 (Striated Platform) ができたのではなからうか。この湧別技法による石核を白滝型、さきの半円盤状の石核を狩太型とも呼んだらどうであろうか。さらに北海道には、砲弾状を呈し、調整打面をもつ石核がある。それは、内地の細石核とは似ているが、おそらく無関係のものではなからうか。刃器石核と細石核は理論的に相通するものがあり、刃器石核とこれとは系統的な関係さえあるような気がする。これを置戸型としたらどうであろうか。

#### 四、先土器時代文化の編年について

最近、先土器時代の文化の編年は、一つの転換期をむかえたような気がする。それは、いずれ来るべきものと思っていたし、それにより発展すべきものと考えていた。従来は、古い方から敲打器文化、刃器文化、尖頭器文化、細石器文化というように、かなり単純なものであった。しかし、当然ながら、これにも根拠があったのである。すなわち、岩宿遺跡における岩宿Ⅰ・岩宿Ⅱ・岩宿Ⅲ？ 石器文化の層位的な観察、および武井遺跡における武井Ⅰ・武井Ⅱ石器文化の層位的な処理がこれである。

しかし、その系列の中にもなかったように、問題は細石器文化の中に起ってきた。まず長野県矢出川遺跡において、その出土層位がローム層上面とされてきたが、数度の調査で、それはローム層中であることがわかった。さらに、静岡県休場遺跡においては、再度それがローム層中であることが確認されただけでなく、それが立川ローム層の上部であることも明らかになった。そして、そこに炉址の存在したことから、木炭を採集することができて、放射性炭素の測定により、一つの年代決定の結果がでた。それは一四三〇〇±七〇〇年前というものであった。

一方、いままでに、茂呂石器文化について、休場遺跡のそれよりはやや下位という観察ができるとしても、それは立川ローム層上部であり、そして黒曜石の水和層の厚さの測定により、一七〇〇〇年前と一八七〇〇年前という二つの年代決定がでている。

刃器文化は、その後も石器の型式上の種々の変遷を経て、継続したことは疑いない。そして、それが尖頭器文化に到達しているであろうことも、武井Ⅱ石器文化の組成からして十分考えてみねばならないことである。それは、また別の重要な問題としても、ここに刃器文化と細石器文化の併行説を考えてみねばならなくなった。そして、このような矢出川・休場遺跡の細石器文化は、おそらく尖頭器文化よりも古いかもしいないということを検討してみる必要ができてきたのである。わたくしの経験では、尖頭器文化の層位は立川ローム層に例をとれば、その頂部であり、黒曜石水和層の測定によれば、九〇〇〇年前と一一〇〇〇年前という年代決定がでているから

である。

ここでいう細石器文化の石核は傾斜打面をもった、半円錐形あるいは円錐形の細石核である。これを古型式の細石器文化としよう。細石器文化には、その外に船形石核を伴う、そしてより後出と思われる文化がある。これを新型式の細石器文化としよう。この両者の関係が一つの問題として出てくる。さらに、後者と尖頭器文化との関係も新しい問題である。これは、つぎの石器文化の当初の石器の問題とも無関係ではないであろう。

このように、日本の先石器時代の文化の編年は、かなり複雑なものであることが分かってきた。この複雑さを整理することによってこそ、つぎのより確固とした編年が打ち立てられると思う。

〔考古学集刊〕第三卷第三号 一九六七年

## 五、先石器時代と旧石器時代について

再び先石器時代という言葉にもどりたい。芹沢長介氏は、日本の無石器文化はほとんど洪積世に及ぶような古い年代に属するから、今後はそのような仮称を用いる必要がなく、旧石器時代の文化と呼べばよいという意見を述べている〔旧石器時代の諸問題〕岩波講座日本歴史1。わたくしは、なお多少の問題はあるとしても、それはそれでよいと思う。

しかし、日本の考古学における時代区分を、旧石器・縄文・弥生とすることはいかにもおかしい（一九六六年の考古学界の動向―考古学ジャーナル7）。どうしても旧石器時代という言葉を用いたならば、同氏もいつているように、井草・大丸式土器以前の土器文化には、磨製石器がほとんどなく、漁撈が認められず、狩猟を主体としていたらしく、そして炭素年代によるかぎり、沖積世と洪積世の過渡期にあるということから、これを中石器時代と称することにはわたくしも賛成である（日本における旧石器の層位的出土例とC14年代）日本文化研究所研究報告第3巻。さらに、井草・大丸式土器以後の縄文時代には、当初から磨製石器もあることであるから、これを新石器時代と呼べばよいわけである。縄文時代・弥生時代という名称を使うかぎり、先石器時代という言葉は、やはり現在では最も適当な時代名と考える。ただ、先に述べた中石器時代と呼ぼうとした時代を、すべて縄文時代と

してよいかどうかには問題が残ろう。わたくしはかりにこれを原土器時代と最近では呼んでいる。厳密なことをいえば、その時代の当初の土器から縄文施文の技術があったかどうか、せめてその一群に縄文を有する土器があったかどうかの検討が必要であろう。いま、この時代の土器として、隆起線文土器や爪形文土器や無文土器が知られている。その後には押型文土器がくるらしい。しかし、縄文式土器の系列では、押型文土器の以前に、縄文・捺糸文をもった土器の時期が確然として存在し、しかも明瞭に漁撈を行っていた。炭素年代においては、原土器時代は縄文時代に先行するらしい。問題は原土器時代の終末と縄文時代の初頭とをどう関係させるのかということである。具体的にいえば、汎日本的に土器の発生から押型文土器に至る過程の研究、これはそこに漁撈の起源という問題を含めて、興味ある問題である。いずれにしても、現在では、先縄文時代という言葉をもって先土器時代を意味することはできなくなったわけである。

『考古学集刊』第三巻第四号 一九六七年

〈補注〉

杉原莊介教授の細石器文化についての考え方をまとめた論文は本誌について残されなくて終った。しかし先土器時代全体の中での細石器文化の位置づけや、縄文文化、とくにその初期の文化との関連で、重要な問題を提起した発言は各所にみられる。ここでは論文としては発表されなかったもの(『考古学集刊』の編集後記の一部)を、遺稿という形でまとめて紹介した。

(編集者)